

平成二十二年三月

蟹江町歴史民俗資料館

年報

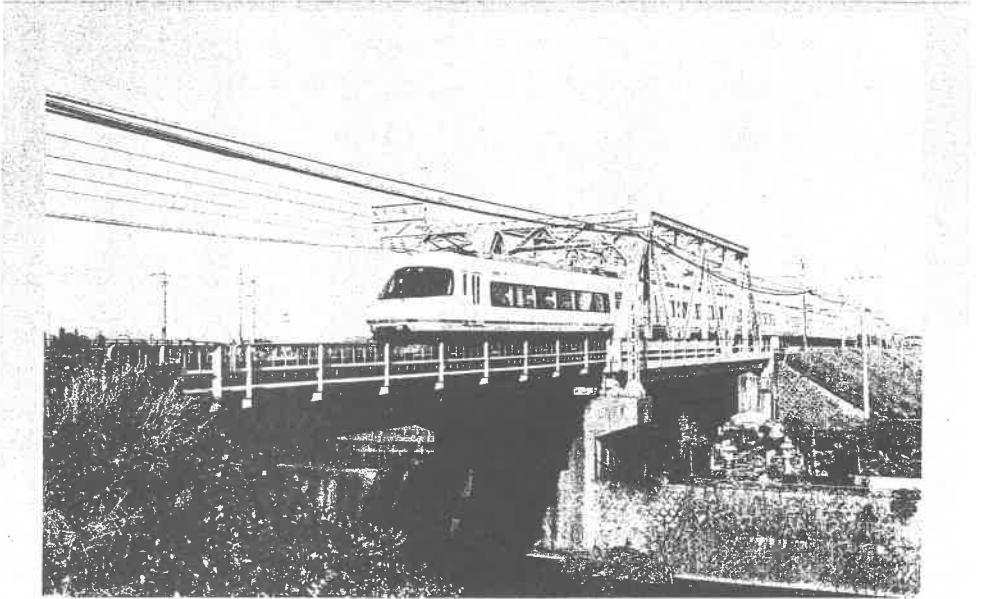
第三十冊

目次

一 「沿革誌」より	1
二 施設概要	5
三 事業概要	6
四 資料の収集・保管	8
五 展 示	26
六 調査・研究	46
七 情報提供	47
八 教育普及	50
九 庶務報告	78
十 文化財保護	86

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

近鉄名古屋線・蟹江駅70年のあゆみ



平成20年11月15日(土)～12月21日(日)

(月曜休館) AM9:00～PM5:00 入場無料

場所 蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室
(蟹江町大字今字蟹江浦23番地4)

主催 蟹江町教育委員会

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係 (歴史民俗資料館)

0567-95-3812

特別展開催にあたり

蟹江町に初めて鉄道が通ったのは、現ＪＲ関西本線の蟹江駅が開業した明治２８年（１８９５）５月２４日、名古屋・前ヶ須（現弥富）間の開通時でした。蟹江停車場（ステーション）と称されて、海部郡の玄関口として機能することとなりました。

鉄道の開通は、近世以来、水運に頼ってきた当地方の生活スタイルを大きく変革させ、蟹江停車場の周辺には、旅館や商店を営む多くの新住民が移り住み商店街が形成されるようになりました。

蟹江町内のもう一つの鉄道駅である近鉄（近畿日本鉄道）蟹江駅の設置は、昭和１３年（１９３８）６月２６日、近鉄の前身である関西急行電鉄が名古屋・桑名間を開通させた時に、蟹江本町地区に設置したものでした。紆余曲折を経て現在の近鉄名古屋線となり、毎時、便利な電車を多く走らせたことから、やがて関西本線を凌駕するようになり、付近にも多くの商店が建ち並ぶようになって、町内一の繁華街が形成されることとなりました。

当町を横断する近鉄名古屋線と近鉄蟹江駅が、本年度で７０年周年を迎えることになり、その歩みをテーマとしてここに特別展を開催する次第です。

なお、特別展開催にあたり、同館の開催趣旨をご理解いただき、資料及び情報提供などご協力をいただきました方々に対しまして、ここにお礼申し上げる次第です。

平成２０年１１月吉日

蟹江町歴史民俗資料館

近鉄名古屋線・蟹江駅70年の歴史

1 近鉄の母体となった大阪電気軌道（大軌）

近鉄（近畿日本鉄道）の発祥は、明治43年（1910）3月設立、大正3年（1914）4月、大阪上本町と奈良間を開通させた奈良軌道に始まる。すぐに社名を大阪電気軌道（大軌）と改称し一時経営困難に陥りながらも再建、その後大阪府東部や奈良盆地一帯で着実に事業規模を拡大する一方、昭和2年（1927）参宮急行電鉄（参急）を設立し、桜井（奈良県桜井市）～宇治山田（三重県伊勢市）への免許を取得して青山トンネルなど幾多の難工事を着々と進めて伊勢平野へ路線を伸ばし、昭和6年（1931）3月これを開通させた。両社は大都心（大阪）から伊勢神宮・奈良東大寺などへの参拝客を対象にした観光的色彩の強い鉄道会社であった。

2 関西急行電鉄の進出と蟹江駅の設置

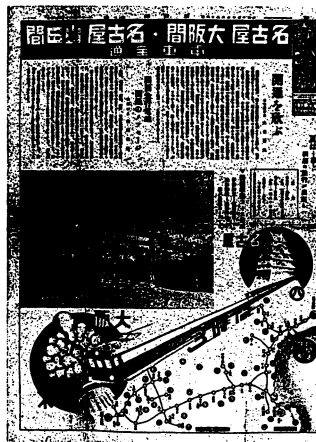
蟹江町を走る名古屋線の誕生は、前身の伊勢電気鉄道（伊勢電鉄）が昭和3年（1928）11月、桑名・名古屋間の路線免許の認可を受けたことに始まる。

伊勢電気鉄道は明治44年（1911）創立され、大正4年（1915）三重県の一身田・白子間を蒸気機関車で開業し、その後逐次路線を延長して13年（1924）4月までに津新地・四日市間を全通、大正15年（1926）に伊勢電気鉄道と社名を改めて、昭和元

年12月（1926）に全線を電化した。次いで昭和4年

（1929）1月、四日市・桑名間を開通、10月桑名・揖斐間の養老電鉄を合併し、翌年津新地・新松阪間、12月新松阪・大神宮前（現伊勢市）を開通させて三重県伊勢平野で着実に路線を拡大してきた電鉄会社であり、やがて関西鉄道（現JR関西本線）と同じ目的から名古屋への進出を試みるようになった。

伊勢電鉄の計画においても桑名～弥富～津島～名古屋と

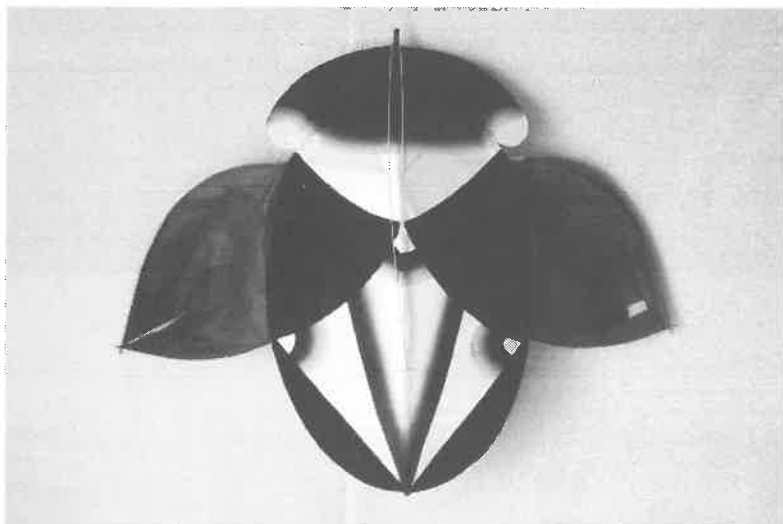


昭和13年6月26日付け 新愛知新聞「関西急行電鉄開通」記事

（資料提供：山田幹夫様）

蟹江町歴史民俗資料館特別展示

「郷土の和凧展」



名古屋凧 虻

平成 21 年 1 月 10 日(土)～2 月 15 日(日)

(月曜休館) 午前9時～午後5時 入場無料

場 所 蟹江町産業文化会館 1階 企画展示室
(蟹江町大字今字蟹江浦23番地4)

主 催 蟹江町教育委員会

問い合わせ先 生涯学習課歴史民俗係(歴史民俗資料館)
0567-95-3812

開 催 に あ た っ て

お正月の遊びとして挙げられるもののひとつに、凧揚げがあります。日本の凧揚げの歴史は、奈良時代以前からあるともいわれます。平安時代には、特権階級の遊びであったものが、中国や南蛮文化の影響も受けながら各地に広まり、江戸時代には庶民の遊具として広く親しまれるようになりました。凧も、様々な技巧を凝らしたものが生まれました。凧の流通も盛んに行われ、江戸では正月になると凧を売る出店や行商が多く出て、子どもたちはお年玉で凧を買い求め、凧揚げに興じたといえます。一方、各地で郷土独特の凧や風習が発達し、正月の遊具としてだけでなく、初節句の祝いの贈呈品にされ、子どもの成長を願う縁起物として伝承されているものなどもあります。

しかし、時代の変化により、凧揚げする子どもたちの姿は次第に見られなくなり、凧を製作する技術者も減少してきています。今回の特別展では、日本各地の郷土に伝わるさまざまな凧を紹介します。その技巧の多彩さ、美しさを感じ、郷土の伝統文化を改めて認識していただく一助になればと存じます。

なお、今回の展示にあたってご協力いただいた方々に対しまして、ここに厚く感謝申し上げます。

平成21年正月吉祥日

蟹江町歴史民俗資料館

1 愛知県の凧

名古屋の凧

愛知県は日本国内でも、凧揚げの盛んな地域で、その製作の巧みなことでも全国に知られています。愛知の凧としてよく知られているものに、名古屋の凧、安城の桜井凧などがあります。

名古屋周辺の地域は、伊吹山から吹きおろす強風「伊吹おろし」が吹きすさぶ環境のなかで発達したといわれます。尾張名所図会にも、凧は名古屋の名産と記され、凧揚げの様子が描かれています。名古屋の凧には、蛇、蟬、福助などがあり、「ベカ」と呼ばれる凧は弓形の「うなり」をつけ、強風を受けて「ベカ、ベカ」と袖を振り、ぶんぶんときりながら揚がるもので、名古屋古流凧の原型だといわれています。名古屋の凧は小型で細工が細かいのが特徴です。一説によると、江戸時代に大凧に乗って名古屋城の金蔵をはぎ取った者があり、それ以来大凧作りが禁止されたため、小さくて精巧なものへと発達していったとされています。特に高級凧といわれるものは、骨にはすす竹を使用し、組み方も精巧で美しく仕上げられています。

安城の桜井凧

安城市の桜井は矢作川の川原が近く、古くから凧揚げの盛んな地域でした。桜井凧には、福助、蜂、蝶などがあり、かつては名古屋の間屋にも納めていました。甚目寺観音、笠寺観音など、各地の縁日にも店を出し、特に正月の熱田神宮では多くの人が桜井凧を買い求めたそうです。

蟹江の凧

蟹江町に古くから伝わる凧は、蟬凧といい、形は名古屋の「凧ベカ」とよく似ていますが、大きさは小型の名古屋の凧と違い、約1mと、かなり大きい造りになっています。名古屋の西隣に位置する蟹江町は、伊吹おろしが強く吹く地域です。禁止令によって小型になったといわれる名古屋の凧の本来の姿である、強風に強い大きくて丈夫な凧の姿を残しているといえるかも知れません。その骨組みの精巧さは、名古屋の高級凧と比べても劣ることはないものとなっています。